「人のふり見て」

～目を覚まして見つめるのは主イエスのお姿～

ペトロの手紙二２章 10b～16 節　讃美歌 58、195

10 彼らは、厚かましく、わがままで、栄光ある者たちをそしってはばかりません。11 天使たちは、力も権能もはるかにまさっているにもかかわらず、主の御前で彼らをそしったり訴え出たりはしません。12 この者たちは、捕らえられ、殺されるために生まれてきた理性のない動物と同じで、知りもしないことをそしるのです。そういった動物が滅びるように、彼らも滅んでしまいます。13 不義を行う者は、不義にふさわしい報いを受けます。彼らは、昼間から享楽にふけるのを楽しみにしています。彼らは汚れやきずのようなもので、あなたがたと宴席に連なるとき、はめを外して騒ぎます。14 その目は絶えず姦通の相手を求め、飽くことなく罪を重ねています。彼らは心の定まらない人々を誘惑し、その心は強欲におぼれ、呪いの子になっています。15 彼らは、正しい道から離れてさまよい歩き、ボソルの子バラムが歩んだ道をたどったのです。バラムは不義のもうけを好み、16 それで、その過ちに対するとがめを受けました。ものを言えないろばが人間の声で話して、この預言者の常軌を逸した行いをやめさせたのです。

民数記 22 章 22～35 節

22 ところが、彼が出発すると、神の怒りが燃え上がった。主の御使いは彼を妨げる者となって、道に立ちふさがった。バラムはろばに乗り、二人の若者を従えていた。23 主の御使いが抜き身の剣を手にして道に立ちふさがっているのを見たろばは、道をそれて畑に踏み込んだ。バラムはろばを打って、道に戻そうとした。24 主の御使いは、ぶどう畑の間の狭い道に立っていた。道の両側には石垣があった。25 ろばは主の御使いを見て、石垣に体を押しつけ、バラムの足も石垣に押しつけたので、バラムはまた、ろばを打った。26 主の御使いは更に進んで来て、右にも左にもそれる余地のない狭い場所に立ちふさがった。27 ろばは主の御使いを見て、バラムを乗せたままうずくまってしまった。バラムは怒りを燃え上がらせ、ろばを杖で打った。28 主がそのとき、ろばの口を開かれたので、ろばはバラムに言った。「わたしがあなたに何をしたというのですか。三度もわたしを打つとは。」29 バラムはろばに言った。「お前が勝手なことをするからだ。もし、わたしの手に剣があったら、即座に殺していただろう。」30 ろばはバラムに言った。「わたしはあなたのろばですし、あなたは今日までずっとわたしに乗って来られたではありませんか。今まであなたに、このようなことをしたことがあるでしょうか。」彼は言った。「いや、なかった。」31 主はこのとき、バラムの目を開かれた。彼は、主の御使いが抜き身の剣を手にして、道に立ちふさがっているのを見た。彼は身をかがめてひれ伏した。32 主の御使いは言った。「なぜ、このろばを三度も打ったのか。見よ、あなたはわたしに向かって道を進み、危険だったから、わたしは妨げる者として出て来たのだ。33 このろばはわたしを見たから、三度わたしを避けたのだ。ろばがわたしを避けていなかったなら、きっと今は、ろばを生かしておいても、あなたを殺していたであろう。」34 バラムは主の御使いに言った。「わたしの間違いでした。あなたがわたしの行く手に立ちふさがっておられるのをわたしは知らなかったのです。もしも、意に反するのでしたら、わたしは引き返します。」35 主の御使いはバラムに言った。「この人たちと共に行きなさい。しかし、ただわたしがあなたに告げることだけを告げなさい。」バラムはバラクの長たちと共に行った。

■ 本論

現在のトルコにあたります小アジアの諸教会が、偽教師たちの横暴にかき乱されている。その知らせを受けましたペトロは、諸教会を偽教師の手から守るために、この手紙を書き送りました。

今日、お読みしたところには、偽教師たちがどういう仕方で、教会の秩序を壊していたのかが報告されています。

それは何より、10 節、「*彼らは、厚かましく、わがままで、栄光ある者たちをそしってはばかりません*」と言われています。

この「栄光ある者たち」というのは、教会の中で責任を与えられている人たち、神様に栄光を託された人たち、教会の役員の人たちであると考えられます。

この人たちの言うことを、偽教師は聞かない。その権威を認めない。

自分こそが神様であるような顔をして我が物顔で振舞っている、ということです。

彼らは 12 節、「*知りもしないことをそしる*」。知りもしないことを大声で語る。

もちろん、偽教師たちも、一応は、「教師」と呼ばれた人たちですから、それなりの聖書の学び、教会の教えの学びを積んだはずなんです。が、それが極めて中途半端なものであったために、たちが悪かった。

どんなことでも、何か一つ真剣に学び始めますと、自分がいかに無知であるかということに気づか

されます。一つ知ったその背後に、無数の知らない世界が広がっていることに気づかされます。気づかされたならば、知り得たことだけを語り、知らないことには口をつぐむことに自ずとなっていきます。それが学ぶということです。

ましてや、神様のことなんです。信仰の事柄なんです。人間の魂がかかっていることなんです。知らないことをペラペラしゃべるなんてことがあっていいわけがない。

いや、ペラペラしゃべれないはずなんです。

例えば、「神様はどういうお方か」と問われたときに、私たちは、そんなにスラスラと言葉がでてくるだろうか。神は愛であるとは言える。しかし、口ごもるということがある。もちろん、「神は愛です」。そのことに心から同意する。

が、その愛には厳しさがあって、試練があって、でもやっぱり憐みがあって、でも、それだけではない気がして、というようにパッと、ひと言で、端的に語れないところがある。そういう在り方は伝道には不向きでしょう。決して人をひきつけはしない。

けれども、その口ごもる、うまく言えないということには、ある真実なものに触れている、大きなものに触れている、自分はまだ知らないということに気づいているということがあらわされているのではないか、と思うんです。ですから、ひと言で単純化しては語れない。神様についても、教会についても。

ひとつ学ぶたびに、ひとつ経験するたびに知らないこと、語り得ないことに気づいていく。どんどん口ごもっていくということがある。

それに対して、偽教師たちがペラペラ喋れたのは、自分が何も知り得ていないことを、知らなかったからです。

ですから、口から出まかせに、極めて物事を単純化して語ることができた。

それは聞く者には分かりやすかったでしょう。人を惹きつけもしたでしょう。

が、彼らが語っていたのは、神の言葉ではない、自分の欲望の言葉であった。

しかも、その言葉を「そしる」ために用いていたのです。神様を、教会を非難して、その価値を下げて、自分の価値を高めるために用いていた。

それもおかしなことです。学ぶということは、学ぶ対象を愛するためになすんですよね。良くするために、役立つために。それに対して、誰かを非難するために、神をそしるために、教会を壊すために、というのは学ぶ者、教える者のすることではない。

が、何かを、誰かを批判している言葉というのはこれまた、とても魅力的に聞こえます。語っている者を、正義の使者に見せます。本人も気持ちよくなってくる。ですから、どんどんと声は大きくなる。すると、どんどんと学ばなくなる。学ぶと単純化できませんから、そんなことしなくても、いや、そんなことしない方が喝さいを浴びることができますから、どんどんと大きな声で、どんどんと勇ましい言葉で、何かを、誰かを非難する言葉が語られていく。

今、わたしたちの社会でもてはやされているのも、そういう声です。

嘘も、デマも、大きな声で何度も語られていると、本当になっていくと言いますか、本当にされていく、という恐ろしさがありまして、ペトロが手紙を宛てた教会も、そういう恐ろしさの只中に置かれていたわけです。

偽教師たちは具体的に何を語り、何をしていたのか。

第一に、13節、*彼らは、昼間から享楽にふけるのを楽しみにしています。*

以前にお話しをしましたように、偽教師たちはグノーシス主義の強い影響を受けていました。グノーシス主義は、目に見えない霊的な事柄を過度に重視し、目に見える肉的な事柄を過度に軽視します。そこから、グノーシス主義者の生活は、二つの極端な傾向を見せました。ある人たちはこの世との関りを断って極端な禁欲生活を送りました。ある人たちは極端に堕落的な、極端の不道徳的な生活を送りました。つまり、彼らにとって、この世界は悪しき神に造られた世界であって、生きるに価するものではない。真面目に生きるに価しない。快楽に従順に、価値のない肉体を傷つけるようにお酒を飲み、異性との関係にふけり、したいことだけをするという生活に走りました。この世に価値はないと。はかないと。ならば快楽に生きなければ損であると。

ここで言われている偽教師たちはそのタイプのグノーシス主義者でした。

しかも、そういう生活を聖書の教えだと語っていました。自分たちの快楽を弁護するために聖書を読んでいた。例えば、ダビデもソロモンも女性関係が派手であったと、イエス様も宴会好きで、大酒飲みであられたと、都合のいいところだけを引っ張り出してくる。

そんなふうにして真面目腐った教会は間違っているんだと、大きな声で、物凄い勢いで語る。そうしますと、教会で小難しい聖書のお話を聞いているよりも、そっちの方が楽しいじゃないかという人もでてくるんです。

ずっと、教会にいる人は、ちょっとそれはおかしいんじゃないかと思って、ペトロに手紙を書いているんですけれども、14節で言われている「心の定まらない人々」や、まだ教会に通い始めたばかりの人は、そっちに引っ張られちゃう。

さらに、偽教師たちは、13節、「*あなたがたと宴席に連なるとき、はめを外して騒ぎます*」とある。それが普通の宴会であるならば、少々はめを外すのも良いでしょう。楽しい交わりは大切です。

が、ここで言われているのはそういうことではない。「*あなたがたと宴席に連なるとき*」というのは、教会でしている愛餐会のことであり、聖餐式のことなんです。

その聖餐式のときに、イエス様の十字架を想い起す、イエス様に赦された自分の罪を想い起す、感謝をもって食事を共にするというのではなくて、もう酔っぱらっちゃっているというんです。それで、大騒ぎをしている。礼拝を壊しているんです。

しかも、その酔いに任せて、「*その目は絶えず姦通の相手を求め、飽くことなく罪を重ねています*」というように、一体、聖餐式のときに何を考えているのか、何をしに礼拝に来ているのかという、この状況に教会は悩まされていたのです。

おおよそ信じられない、しかし、教会にこそ信じられないことが起こるものです。

人間のグロテスクな罪が露わにされる。

もう偽教師に、教会の役員の人たちが言っても聞かない。

神様の権威なんて言っても、まったく畏れていない。

が、人々を惹きつけてやまないという偽教師たちに、教会の人たちはほとほと困り果てて、ペトロに助けを求めたわけですね。

そこで、ペトロが持ち出したのが、ボソルの子バラムのお話でした。

このお話は、民数記22章から24章にも及ぶ、旧約聖書のなかで一人の人物に、しかもイスラエルとは直接には関係ない一人の人物に、これだけの分量が割かれるという非常に珍しいお話になっています。その一部を、先ほどお読みしました。

なかなかユニークなお話でして、ちょっとかいつまんでお話します。

時は、出エジプトを果たし、荒れ野を旅し、いよいよ約束の地カナンを目の前にしたイスラエルが、モアブという地域に入ったときのことです。

モアブの王は、自分たちの国がひと飲みにされるのではないかと恐れます。

そこで、有名な占い師であったバラムを招聘しようとします。

このバラムが味方に付けば百人力。イスラエルも恐れるに足らずと、モアブの王は「あなたが祝福する者は祝福され、あなたが呪う者は呪われる」（22章6節）と最大限の賛辞とたくさんの贈り物とを送ります。

が、バラムは神様に言われていたんです。「この民を呪ってはならない。彼らは祝福されているからだ」（同12節）。ですから、モアブの王の申し出を断ります。行くことはできませんと。神様が行くなと言われています、と断ります。

が、モアブの王はあきらめきれませんで、もう一度、より高い位の使者を送りまして、「もう何でもバラムのほしいものはあげる。何でも言うことを聞く。だから、イスラエルを呪ってよ」と頭を下げるんです。

しかし、バラムは神様に言われていますので、「私は行きません」と断る。ただ、使者たちに、すぐに帰れとは言わないんです。今晩、泊まっていきますかと言う。

で、その夜、バラムは一生懸命に祈るんです。「神様、ちょっとモアブの王のところに行きたいのですが」と。「行くだけです」と。「イスラエルの民を呪うことはしません。行くだけです」と。バラムの心は、お金と名誉に揺らいでいたんですね。

そこで、神様は「行くだけなら、行ってもいい」と、ただし、「わたしの告げることだけを行わねばならない」と、そう念押しをして、バラムを送り出されるんですけれども、もうバラムの心は弾んで、意気揚々とモアブの王のもとに向かう。

さすがに、それはまずいと、あいつはお金と名誉に目がくらんで、イスラエルの民を呪うつもりであると、神様が待ったをかけられた。

主の御使いが、バラムの乗ったろばを遮る。主の御使いは、剣を構えていまして、今にも切りかかってきそうだと、その御使いの姿がろばには見えていまして、道を外れて、畑の方に入って行く。他方で、バラムの目には、御使いの姿が見えていませんので、ろばがアホな行動をしているということで、ろばを打って、もとに戻そうとする。そんなやりとりを三回、繰り返したときに、神様がろばの口を開いて、語らせるんです。「何をしとるんじゃと。なんで、わしを打つんだ」と。そう言われたバラムも頭にきていますので、「お前が勝手なことをするからだ」と言い返す。すると、ろばは、「今までこんなことなかっただろうと、あるのか」と問いただす。その勢いに負けまして、バラムは「いや、ない」と、すいません、とたじろく。

そこで、神様はバラムの目を開き、主の御使いの姿を見させられまして、なぜ、ろばが道を外れたのか、そうしなければ、神に打たれていたと、そもそもお前は自分の胸に手を当てて、モアブの王のもとで何を喋ろうと思っていたのかを考えろということで、バラムは神に立ち帰るという、ひとまずそういうお話なんですね。

このバラムが、偽教師の姿と重なると、ペトロは言っているんです。

つまり、バラムは、神の声を聞く人であった。そして、一度は、その神の声に従って、イスラエルを呪うことはしないと決意した人でした。使者を追い返した。

しかし、目の前にお金やら名誉やらを積まれていきますと、その決意は揺らぎまして、モアブの王のもとに行っちゃうんです。いや、行くだけだと自分にも言い訳しながら、でも、神様は心のうちをご存じで、主の御使いを遣わされる。

バラムはその力が、モアブの王に届くほどに有能な人でした。神の言葉に対する忠実でもあった。でも、その人でも欲望に動かされちゃったんです。まあ、行っても大丈夫だろうと、うまく語ればいいだろうと、自分勝手に神の言葉を解釈した。

偽教師たちも、最初は真面目な人たちであったかもしれない。そういう姿勢を、もしかしたらペトロは知っているのかもしれない。しかし、それがどこかで変わった。

だから、立ち帰ってほしい。そういう嘆きが、そういう願いが、ここにはあります。

が、それ以上に、ペトロがここで語ろうとすることは、教会の人たちに対してです。この手紙が直接、宛てられているのは偽教師にではない、教会に対してです。

ペトロは、教会に対して言葉を送っているんです。ペトロが最も語りたいことは、「*ものを言えないろばが人間の声で話して、この預言者の常軌を逸した行いをやめさせたのです*」ということです。

ものを言えないろばが、実はバラムよりも神様のことがよく見えていて、主の御使いが剣をもって構えている、すなわち、神様は激しく怒っているということがよく見えていて、でも、そのことがバラムにはまったく伝わらなくて、バラムから送られたりして、攻撃を受けたりして、でも、ろばは忍耐して、忍耐して、怒りをぐっと我慢して、神様が口を開いてくださったときには、一切の攻撃的な言葉を排除して、ただ、バラムの過ちだけを指摘する。しかも、バラムに敬意を込めて、「わたしはあなたのろばです」と言う。そして、今までこんなことをしたことはなかったと、共に生きてきてこんなことはなかったと、親しみを込めて語りかける。

攻撃的なバラムに対して、ろばは一貫して親愛と謙遜をもって語りかける。そのろばに、バラムは頭を下げるんです。

そのとき、神様は、バラムの目を開かれる。これは、逆ではないんです。

先に、バラムの目が開かれて、ろばの言っていることが分かったのではない。

ろばの持っていた親愛と謙遜とに打たれて、首を垂れたバラムの目を、神様は開かれた。ろばが、バラムの回心を導いたのです。

ペトロの見立てでは、このお話の主人公は、ろばなんです。

そして、このろばこそ、あなたたちだと、ペトロは教会に言葉を送っている。

11 節に、*天使たちは、力も権能もはるかにまさっているにもかかわらず、主の御前で彼らをそしったり訴え出たりはしません*とありました。

この天使たちは、文字通り神様の御力を体現する御使いのことかもしれませんし、あるいは教会に集う人たちの忍耐する様が言われているのかもしれません。

偽教師たちは、栄光ある者たちをそしっている。

しかし、そしられている方は、偽教師のことをそしったり訴え出ることはしない。

ぐっと耐えている。そして、むしろその人たちの方が、*力も権能もはるかにまさっている*。神様のことをよく知っているんだと。キリストの十字架の忍耐をよく知っているんだと言う。イエス様がエルサレムに入るときに、用いられたのはろばであった。

まるで、バラムの乗ったろばのように。そのろばだけが、バラムを変えることができました。神様は、ろばによって、バラムが変えられるのを待たれたんです。

ろばの親愛が、バラムに、自分の罪に気づかせたんです。

あなたたちは、このろばだと、ものを言えないろばだと、口ごもる者たちだとペトロは言っている。神様に口が開かれたときには、親愛と謙遜だけを語るろばだと。

それは、非常に厳しい道かもしれない。悔しい道かもしれない。

しかし、そのろばの歩んだ道こそが、神を知っている、よく知っている、ゆえに口ごもるけれども、多くは語れないけれども、はるかにまさっていると言われる道。

その偉大な道を歩みましょう。このろばの道を歩ませていただきましょう。

口ごもりながら、神様が与えてくださる言葉だけを、人を活かす言葉だけを語る幸いな道を。お祈りをいたしましょう。

■ *祈り*

「この人たちと共に行きなさい。しかし、ただわたしがあなたに告げることだけを告げなさい。

■ *静止の時*

『子どもと親のカテキズム』

問４６　教会(きょうかい)の礼拝(れいはい)で、私(わたし)たちは何(なに)をするのですか。

答　教会(きょうかい)の礼拝(れいはい)で、私(わたし)たちは神(かみ)さまと交(まじ)わり、神(かみ)さまをあがめ、神(かみ)さまを喜(よろこ)び、賛美(さんび)します。聖書朗読(せいしょろうどく)と説教(せっきょう)をきき、聖礼典(せいれいてん)をおいわいします。また、お祈(いの)りをし、賛美歌(さんびか)を歌(うた)い、信仰(しんこう)を告白(こくはく)し、献金(けんきん)をささげて教会(きょうかい)の働(はたら)きに仕(つか)えます。

礼拝とは何かと問われて、礼拝は、私たちと神様との交わりの場であると答えることに異議はないかと思います。

礼拝において、神様はわたしたちに福音を聞かせてくださり、祝福を送ってくださいます。その感謝の応答として、また、神様に従うという献身として、賛美をささげ、祈り、賛美をささげ、献金をささげます。それら一切を神様が喜び、受け取ってくださると信じて、献げます。ここに、神様とわたしたちの交

わりがある。

それは極めて明確なことです。が、他方、それは必ずしも容易ならざることであることを私たちは知っています。世の雑事があります。雑念がわたしたちから離れることはありません。本当に、神様に心傾ける、それは決して簡単なことではない。わたしたちが持つ罪は、いつも神様から私たちを引き離そうとしています。

ですから、備えが大切です。礼拝の場が大切であることは言うまでもない。備えの時が大切です。祈り備えることです。その備えが一人ひとりの信仰を、また教会の信仰を支えます。